

高山の文化を高めた人々〈2〉

俳句・短歌の目ざめ

永田不及、福田鋤雲、福田夕咲

明治初年、高山の俳壇、歌壇はというより我が国の俳壇、歌壇は救いがたいまでに陳腐で、およそ文芸という範疇に入れるのさえはばかれるような実態であった。

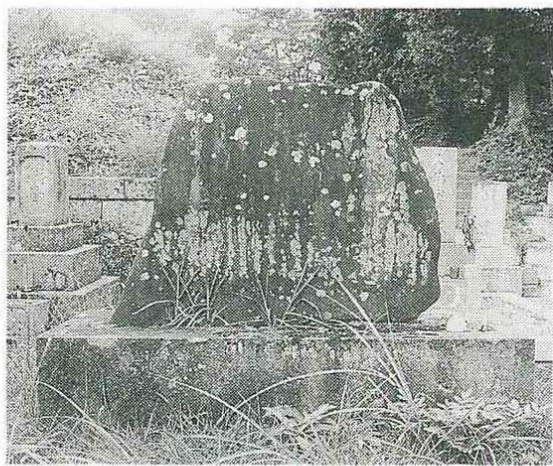
そうした中で正岡子規が新しい文芸の方向を提唱し、それまで俳諧とか発句と呼ばれたものを俳句と唱え、一方和歌も短歌と呼んで文芸の新しい方向を示した。

俳句では、子規の門に高浜虚子・河東碧梧桐などが輩出し、虚子は花鳥諷詠の写生を主張し、河東碧梧桐は有季定型にあき足らず、こうした型式を超えた新傾向を推し進めた。

短歌の方も子規の開眼について、与謝野晶子など明星派を中心とする浪漫主義運動が興った。

しかし、高山の俳壇は相かわ

らずの宗匠俳句が全盛で、且那衆の手むずりの域を出ずおよそ文芸というものからは程遠い存在であった。こうした中で、高山一の素封家であり初代高山町長や貴族院議員も勤めた大旦那、永田吉右衛門は、不及と号し、その会衆に小店主、小役員などわけへだてなく迎え入れて、「怒ったことがない」というその温厚な人柄とともに庶民に歓迎され、飛驒の俳壇の大衆化の途を拓いた。



大隆寺「花蔭会」句碑

不及が主宰した「花蔭会」は、そうした意味で高山の俳壇の近代化に貢献した。

一方福田吉郎兵衛は、大新町

で「高山伊鯖市場」を営むかわら、春慶塗問屋として、新しい様式や、手法を導入し、販路を全国に求めて拡張し、製造、販売の両面において今日の飛驒春慶塗の産業基盤を築いた大功績者といえるが、一方、高山町長を勤め、漢詩を能くし、俳句においては鋤雲と号したまたまた来高した河東碧梧桐を知るのを契機に、新傾向の俳句の新鮮さに理解を示し、その後、高山俳壇の中心的流れとなっていく新傾向俳句の興隆に大いに努めた。

永田不及によって開かれた高山俳壇だとするならば、福田鋤雲によって高山の俳句は前進し、文芸として近代化したといえる。

その後高山の俳壇は一層庶民化し、大正、昭和初期の隆盛期を迎える。

短歌の方も、田中大秀とその一門の流れを汲む観念的な作風

で晦冥な状態にあり、中央の流れはなかなか浸透しなかったが、福田有作が、早稲田大学を卒業後、朝日新聞社で文芸欄を担当し、北原白秋や若山牧水と交友したが、家業の都合で高山に帰り、その後の高山歌壇に新風を入れると共に、実質的な指導をした。

有作は、夕咲と号し、近代詩をよくし、飛驒の短詩型文学の旗手として活躍したが、考古学、民俗学などの分野にも深い知識を披瀝して大正、昭和初期における高山の知識を代表する人物として活躍した。

永田不及、福田鋤雲、福田夕咲この三人の努力によって明治以降の旧態然たる高山の短詩型文学は近代化した。